

## 七 逆境の妙趣

斯様に論じ来れば、世の人、二口目には直に、順境だとか逆境だとか云ひ出すが、境其の者に順逆のあらう筈はない。勿論、事に當るに多少の苦痛と困難とはある。併しそれは、澤庵大根に重石のある如く、豆腐に苦鹽のある如く、之が却つて薬で、なくてはならぬものであります。甘酒にも生薑のヒリヒリが必要なる如く、人生が順境のみでは、温萌の獨活のやうになつて、なまくら、のらくら、ぼんくら、てんくらになつて了ふ。

昔は「吾に艱難を與へ給へ」と祈つた人もあり、「憂き事の尙此上に積もれかし、限りある身の力試めさん」と力味んだ人もある。日本は貧國であると歎く人もあるが、實際日本人は貧乏位は何とも思はぬでなからうか。貧乏位に負けてはつまらぬ。と云つて固より貧乏を奨励するのではない。その勇氣が欲しいのである。

或人かつて貧の八徳を數へらる。仲々面白い。(一)貧なれば人に驕るやうなことはないから自然と謙遜になる。所謂「敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極」てふ、『禮記』の四不可の金言に契うであらう。

(二)貧なれば足を知るの徳を養ふ。古句に「鷄母浴身砂當水、猫兒洗面唾爲湯」と。貧なればとて、満足すれば至つて愉快である。(三)貧なれば身心自由にして出入に心配がない。白樂天の語に「富貴にして苦あり、苦心の危憂にあり。貧乏にして樂あり、樂は身の自由であり」と。出るも入るも着物一枚で、着替る世話もない。(四)粗食をも甘く食ふ。西洋の諺に「空腹は最上の料理なり」と。空腹には茶漬が一番甘しい。(五)他人の爲に嫉まらぬ事がない。乞食長者一茶の吟に「紅葉の散り敷く山に丸寢して、我も錦を身に纏ふ哉」とあり。或人は「月さへも高きに住めば障あり、起臥安き草

の狹筵」と、これでは嫉み誇られやうもない。(六)自然に道心が起る。永嘉大師の語に「身貧にして道貧ならず」と。(七)放逸ならずして操守が堅くなる。古人は言ふ「風吹不動天邊月、雪壓不摧磻底松」。(八)貪欲の害を免ることが出来る。頭からも尻からも、養を吸収する馬が居つたとは、斯匿王の夢物語。夢かと思つたら、上から給料、下から賄賂を受ける人もあると云ふ、貧乏人にはそんな氣遣がない。私共裸一貫で生れて來たのだから先づ單位を此處に置いて、此八徳を樂みつゝ、進んで貧を免れる道を、道徳的に辿るのである。

こんな調子で、病氣にも八徳があると云ふ。(一)輕薄なる心を除く。(二)將來の爲に慮る注意を増す。(三)他人の病苦に同情せしむ。(四)殺生の心を去る。(五)人情の淺深を知らしむ。(六)人生の祕密を看破せしむ。(七)深く天分を感悟せしむ。(八)宗教心を興起せしむ。疾病も斯様に善用いたした

い。  
序に吾人の數へた所謂逆境の十徳を列べて見る。(一)逆境は人をして眞面目ならしむ。(二)大憤志を發して發奮の動機を與へる。(三)物事に打勝つ勇氣を養ふ。(四)忍耐の氣風を堅くす。(五)心を鍛鍊して持久の基を作る。(六)遠き慮をなして萬事を警誡す。(七)種々の經驗を得て智慧を増す。(八)同情の念を深からしむ。(九)至誠忠實の人を生む。(十)宗教の信念を興し、一切の御恩を感受す。古今の偉人多く逆境の人たるを思へば、逆境亦如來の善巧攝化であります。